

氏 名	Aung Ko Ko Lynn
氏 名	アウン コ コ リン
学位の種類	博士 (学術)
学位記番号	甲 第 2 1 3 号
学位授与年月日	2 0 1 9 年 6 月 2 8 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	The Direct, Indirect, and Conditional Effects of Intergroup Contact on Outgroup Evaluation among University Students in Myanmar (ミャンマーの大学生における集団間接触が外集団評価に及ぼす効果)

論文審査委員	主 査 教 授 森 島 泰 則
	副 査 名 誉 教 授 磯 崎 三 喜 年
	副 査 上 級 准 教 授 西 村 馨
	副 査 教 授 佐 藤 豊

論文内容の要旨

人間は、集団間の関係を避けて日常生活を送ることは難しい。1950年代以降、「集団間関係」と「集団間競争」というトピックは、さまざまな分野で広く研究されてきた。中でも、ゴードン・オールポートは、集団間の関係を改善するための効果的な方法を概念化した社会心理学者として知られている。ゴードン・オールポート (1954) は、集団間の偏見を低減し、集団間の関係を改善するための強力なツールとして集団間の接触を概念化した。オールポートは、集団間の接触が偏見を低減する上で効果的な4つの条件を挙げている。その4つの条件とは、(1) 地位の平等、(2) 共通目標、(3) 協力、(4) 権威による支援である。オールポートの接触仮説によると、集団間の接触は直接に偏見を低減する。統合脅威論 (ITT) (ステファンとステファン、1996) によると、集団間の不安や集団間の脅威は、集団間の偏見の原因となる。集団間の接触は、集団間の不安や脅威を軽減すると考えられる。統合脅威論によれば、集団間の接触は、間接的に偏見を低減する。先行研究では、偏見の低減における集団間接触の効果は、集団内の状況に応じて変化することを示している。つまり、集団間接触の効果は、文脈に依存している。

そこで、本研究では、集団間接触の3つの次元「質的次元、量的次元、負の次元」を独立変数として設定した。また、集団間不安や集団間脅威の2つの次元「現実的次元、象徴的次元」をメディエーター変数とした。参加者の集団内地位、「国家的文脈、地域的文脈」、対象の外集団や居住地をモデレータ変数とした。そして、負の外集団評価を従属変数として測定した。ここでは、先に述べた2つの社会心理学の理論に基づき、負の外集団評価に関する集団間接触の直接的および間接的影響を調査的研究によって検討した。参加者は、ミャンマーの大学生 4,126 人であった。

データの分析は、SPSSおよびAMOSを用いてなされた。その結果、接触の質が負の外集団評価を抑制し、負の接触が負の外集団評価をもたらすことが明らかになった。その一方で、少数者集団の成員は、多数者集団の成員よりも、国全体の文脈そして地域的文脈においても、接触の質、量いずれのレベルにもかかわらず、より高い負の外集団評価を示した。接触の質がもたらす効果は、地域によっても異なることが明らかとなり、多民族国家の歴史と地域的特性が、集団間関係に及ぼす複雑な影響を示している。

本研究の調査結果は、オールポートの接触仮説と統合脅威論の理論的な概念化と一致している。一般に、集団間接触の質は、直接的に負の外集団評価の低減を予測している。また、集団間不安は、負の外集団評価に関する集団間接触の効果を媒介する最強のメディエーターであることが示された。さらに、少数者集団の参加者は、多数者集団よりも同じ地域に住む他の少数者集団に対して、強い負の外集団評価を示した。この他、集団間競争がない場合、否定的な対人経験が高い負の外集団評価をもたらす、集団間競争がある場合、否定的な対人経験は負の外集団評価に影響しないことが明らかとなった。これらの結果について、本研究が依拠した2つの社会心理学的理論および先行研究との関連から精緻な考察がなされた。

論文審査結果の要旨

社会心理学における集団間関係、ステレオタイプ、偏見の研究は、G.W.Allport (1954)の接触仮説をはじめとしたアメリカを中心とした流れと、H.TajfelやJ.Turnerらによる社会的アイデンティティ理論、自己カテゴリー化理論などのイギリスを中心とした流れがある。その後も、集団間関係に関する多くの社会心理学的理論が提唱され、内集団ひいきや外集団差別の心理的メカニズムの解明と、集団間関係の構築を目指した研究が蓄積されてきた。

本研究は、論文提出者であるAung Ko Ko Lynn氏が、こうした社会心理学的視点から、自らの内発的問題意識に基づき、母国であるミャンマーにおける、多数民族と少数民族の集団間関係と外集団評価への規定因を明らかにしようとした意欲的な試みである。精細な文献研究を行った後、本研究が依拠した理論的背景は、Allport (1954)の接触仮説と、その発展とも言えるStephan & Stephan (1996)の統合脅威論である。Stephan & Stephanの理論的枠組みによれば、集団間脅威と集団間不安が、負の外集団評価や偏見をもたらし、集団間接触は、こうした集団間脅威（現実的脅威と象徴的脅威）と集団間不安を低減させるといものである。ここでは、この理論的枠組みに基づき、多数者（多数民族）・少数者（少数民族）という集団地位が、外集団評価にどのような影響を及ぼすかについて、接触仮説と統合脅威論から導かれる予測の検証を目指した。特筆すべきなのは、多民族社会であるミャンマーの全土に渡る領域（北部地域、中部地域、南部地域）を調査対象として、極めて多くの参加者（4,126人）に対し地理的・地域的特性を考慮した多数民族・少数民族の集団間関係と外集団評価を検討している点である。

著名な社会心理学者であるS.Milgramは、かつて同調と国民性に関する優れた研究を行うに際し、フランス各地から集まったパリ在住の大学生とノルウェー各地から集まったオスロ在住の大学生を対象に実験を行っている。本研究の対象者の選択は、参加者特性に関するMilgramの研究の慎重さにも劣らないものである。そして洗練された調査項目の作成と現地調査が行われ、得られたデータに対しても、高度かつ的確な統計解析がなされていた。

結果も興味深い。まず、接触の質が負の外集団評価を抑制し、負の接触が負の外集団評価をもたらすことが明らかになった。その一方で、少数者集団の成員は、多数者集団の成員よりも、国全体の文脈そして地域的文脈においても、接触の質、量いずれのレベルにもかかわらず、より高い負の外集団評価を示した。接触の質がもたらす効果は、地域によっても異なることが明らかとなり、多民族国家の歴史と地域的特性が、集団間関係に及ぼす複雑な影響を示している。

Lynn氏は、これらの結果について、設定した仮説の観点から丁寧に考察し、依拠した2つの理論の有効性と考慮すべき点について、説得的な議論を展開している。また、口頭試問においても、現実の集団間関係を改善する上でのインプリケーションについての確に言及していた。本論文は、力作であるだけでなく、学術的にも高い価値を持ち、現実事象への果敢なアプローチであることも意義深い点であり、高く評価できる。Lynn氏の努力に心から敬意を表したい。

博士学位論文の公开发表および口頭試問は、2019年5月28日11時30分から12時50分まで、ILC-333において行われた。以上の理由から、本論文が博士学位論文として合格であること、またLynn氏が、心理学の研究者として十分な能力と資質を有しており、博士の学位を取得するに十分値することを、論文審査委員は全員一致して認めた。氏の今後のさらなる研究の進展を大いに期待したい。